

道路に座って客を待つ靴磨き三人。しゃがんで、何もしていない男五人。潔く、日暮れを待っている。かいがいしく道で洗濯物を干す女二人。脇の太い木には枝に口ーブをくくりつけ、ブランコにし

窓のそとは、森

⑥永遠に続くと、いいね。

慶應義塾大学大学院
メディアデザイン研究科教授

中村 伊知哉



ている。おい坊主、そんなに高くごと、間違ったら死ぬぞ。

標高一三三〇m、五百万人都市。ネパールの首都、カトマンズ。「マ」ではなく「ズ」にアクセントがある。「最初はクー」に近い。ネパ



ールのGDPは鳥取県より小さく、一人当たりだと\$六百五十、後発開発途上国。しばしば停電となる。電柱に牛がながれている。その頭上では電線が二十五重に巻かれていた。その上は、永遠に続く空。メインの通りなのに、アスファルトは穴だらけ。車が揺れるというより、跳ねる。父と母に子どもが挟まって、三人乗りのバイク。路地だつてぶっ飛ばして逆走してくる。たまに見かける信号は、全く灯りがついていない。パパーン、プウ、パラパラ。クラクション、クラクション、クラ

クション。

私が愛するこの雑踏の猥雑さは、イスタンブールやハノイ、カサブランカや西安、それらとも似た、大阪よりもでかい人口を持つ都市のみから沸き上がる発酵エネルギーなのだろう。

犬と、牛と、アヒルが同じ向きに歩いている。その先には、寺と仏塔。そして、たたずむヤギ。白いのと、黒いのがいる。白ヤギさんからお手紙ついた。黒ヤギさんからお手紙食べた。この歌は、白と黒が交替して、永遠に続く。

口ずさんでいたら、小学校にたどりついた。一揺れで崩れ落ちそうな狭い校舎だ。ところが子どもたちは上品な英国風制服をまとっている。いい革靴をはいている。みな英語を話す。なけなしのカネをはたいて、公教育に力を入れているのだ。すばらしい。

屈託なく、まっすぐに私の目を見抜いてくる。異国から現れた、異物である私の目を透過して、もっと遠くの、これからの何かを見つめている。一緒に遊んでくれた

のは、十四歳のサビと、十三歳のプニスタと、六歳のサミタと、二歳のサンジエイ。小学校のはずなのだが、町の子ども全員が集まっているのだな。楽しい。

名刺しか持っていないので、配ったら、異様に喜んでくれる。二歳のサンジエイは、受け取ったとたん、食べちゃった！むしやむしやと、おいしそうに、食べちゃった！白ヤギさんからお手紙と思つたのかな？黒ヤギさんからのお手紙と思つたのかな？

幸せだよ。モノが乏しくたつて、みんながいて、にぎやかで、未来がある。永遠に続くと、いいね。

プロフィール一九八四年郵政省入省。橋本行革で省庁再編に携わつたのを最後に退官し渡米。一九九八年MITメディアラボ客員教授。二〇〇二年スタンフォード日本センター研究所長。二〇〇六年より慶應義塾大学教授。社団法人融合研究所所長などを兼務。著書に『コンテンツと国家戦略』(角川P.O.A.選書)など多数。